

■ 書 評



精神疾患のバイオマーカー

中村 純 編
星和書店
2015年3月 286頁
本体価格 5,800円＋税

本書「はじめに」の冒頭で引用されている新潟尚武先生の「癌が分からないといっても癌がそこに在る」という意味では、精神疾患とはまったく次元が異なり、精神疾患の場合はどこが悪いのかさえ不明である」という言葉は現在でも当てはまる一方、当時と現在とでは精神医学・医療を取り巻く状況は大きく異なっています。精神疾患の診療現場で精神疾患の社会認識や精神医療構造の大きな変化が進んでいる一方、近年のゲノム・オミックス技術をはじめとする分子遺伝学的手法の急速な発展や画像技術の急速な進展により、精神疾患の生物学的基盤の解明が、現実的な取り組みとして定着し、加速してきている感があります。現在までのところでは、精神科臨床で広く適用され診断や病態把握に有効性を発揮するバイオマーカーや病態関連の分子標的を狙った治療法の本格的な実装化には至っていませんが、バイオマーカーを駆使した精神科医療がそこまできていることを感じさせるものがあります。

本書は本格的な電気生理学的な基礎研究のバックグラウンドを有した上で、産業医科大学で16年間余り臨床の精神科教室を主宰された中村純先生が編者となられ、同教室と連携する国内の研究者が自ら取り組んでこられた精神疾患のバイオマーカー研究を紹介しながら、その領域の精神疾患のバイオマーカー研究の現状と展望を論ずる内容となっています。14章の章立てとなっており、精神疾患の病態や薬物の反応性・副作用を規定するゲノム多型、血中の代謝産物、脳画像所見、認知機能指標など、精神疾患のバイオマーカー研究がほぼ網羅する形で取り上げられています。対象疾患も統合失調症、気分障害、不安障害、

症状精神病などに触れられ、精神疾患のバイオマーカーに関する概況を把握する目的で通読しても有益だと思われます。

精神医療現場での実用化に向けたさらなる研究の発展には、基礎研究者による脳科学、分子遺伝学などの基礎研究の進展が1つの重要な鍵になりますが、それだけではどうにもなりません。疾患の研究、そして、臨床の現場で何が求められているかを肌で知っている臨床医による研究の推進、さらには、臨床医と基礎研究者の連携なくして発展は望めません。また、バイオマーカーが臨床応用されるに至ったとして、患者さんに丁寧に向き合い、全体を捉えなければそれを有効に活かすことはできず、その上でも臨床医がバイオマーカーの開発の経緯も含めた本質・限界を熟知することは重要なことだと思われます。一方、編者があとがきで述べている通り、「小規模の大学病院ではマンパワー不足がどこでも叫ばれており、基礎実験ができる体制や方法を選択することが困難」になっているという状況があります。このような状況の中で本書の著者達は臨床活動を行う中でバイオマーカー研究の成果を上げ、本書にひとまずの結実をみたということは賞賛に値すると思います。そこには大変なことも多い反面、目の前の患者さんのために少しでも有効な手立てを見出したいという強い思いのほかに、「ヒトを対象とした研究を行っている」と、ヒトが多要因によって成り立っているにもかかわらず案外一定の結果が得られるのは驚きである」とあるように、研究を推し進める原動力となる学問的刺激もあつてのことだと思われます。

本書に書かれている知見は筆者自身達や新たな若手研究者を含め多くの研究者によって、どんどん書き換えられていくことになるでしょうが、それこそが「若い精神科医にとって精神疾患の生物学的マーカーの探究は魅力あるテーマ」と訴える編者らの願いだと思います。精神疾患のバイオマーカー研究の現況を理解することができるだけでなく、臨床医が日常の臨床現場で感じていることをどのように研究に反映させながら研究を進めているのかというイメージを膨らませる上でもよい読み物となっていると思います。

(富田博秋)